

「営団地下鉄」日比谷線運転士 20代(事件当時) 男性の手記

新婚旅行から帰って来て間もない日が、地下鉄サリン事件が発生した3月20日でした。私が運転する中目黒行き列車が仲御徒町駅を発車後、秋葉原駅に向かっている最中に、4本前を走る築地駅を発車した列車の担当車掌の「車内で薬品が爆発した。」との報告を列車無線で傍受しました。

その後、秋葉原駅でお客様の乗降が終わり小伝馬町駅へ向けて発車したところ、前を走る列車に接近したため駅間停車となり「日比谷線運転見合わせ」の列車無線を傍受しました。

私が運転する列車が小伝馬町駅に進入する際、前の列車に乗車していたお客様でホーム上がとても混雑しており、一人の男性のお客様がもがき苦しんでいる状況が目飛び込んできて、大変なことが起きていると思いました。

小伝馬町駅に到着しお客様の避難誘導を行っていたところ、ホーム上の丸柱の脇に透明なビニール袋が落ちていました。ビニール袋には新聞紙に包まれたものが入っていて、床面にはビニール袋から漏れ出した透明な液体がじわーっと広がっていました。この透明な液体が「サリン」でした。

私は自分の足元に漏れ出した「サリン」の液体の上にしゃがみ込み、一緒に乗務していた車掌とビニール袋を指差し「これ何ですかね。」と会話しました。

お客様を駅外に避難させた後、我々も一旦、地上出入口に避難したが、現場確認のため来援した警察官と防毒マスク等を装着した消防庁の方をホーム上まで案内するときに、警察官の方が「サリンかな」というような言葉を発していたのを、今でもはっきりと覚えています。

現場確認が終わり地上出入口に避難していたところ、しばらくして体調の異変に気づきました。まず、視野が狭くなって、視界が暗くなり、指先の震えが止まらなくなりました。段々と自分の体がおかしくなっていき、救急車に乗る際に、首からぶら下げていたカードに住所や名前等を書こうとしたところ、指先が震えていたため字が書けませんでした。救急隊員に口頭で伝えて記入してもらい、病院へ搬送される救急車の中で「こんなことで死ぬわけにはいかない。」と強く思いました。

地下鉄サリン事件を経験して、自分は「生かされているのかな。」と考えることがあります。あの日から30年が経過し当時を知る社員が少なくなり、この経験を若い世代に伝えていかなくてはいけないと思っています。

(2024年9月記)